

遠州公の歌に　ゆがまする人にまかせてゆがむなりこれぞすぐなる竹の心よ
いにしへ茶杓をヲリダメと云は、かならず竹の事也、元伯より草の削始りて、如心齋に至て、草削
を盡すなり、それゆへ、碎啄齋初は利休兩口を寫す、是は疊の目十二半、老年に至て十三目の草削
になるなり、利休兩口の本歌は山中氏所持なり、筒に聚樂とあり、

〔和泉草〕茶酌

一竹茶杓ノ開山周徳ト云者削初羽淵秀廣ト云者傳テ竹茶杓ヲ削、兩代ノ茶杓、其比世上ニ賞翫
セシ也、當代稀也、

一珠光紹鷗ノ時代迄ハ、茶杓ノカタギ大形定リタル故、見知者ハ見能也、上代名人ノ作故、人作不
及也、

一利休茶杓ノ習サマノ也、物毎ノ恰好ヲ茶杓一本ノ内ニ籠タリト、古ヨリ云傳也、目ニ見ヘ、言
葉ニ不及也、能傳受シテ受用スベシ、大秘事也、

一茶杓ノ大概、貝先、打合、節裏、節シメ、移リ、兩脇カスリ、方タメ、下切留メ、色々有、

一臺天目ニテ式正ノ時ハ象牙ノ茶杓竹茶杓ハ略也、常ノ茶湯ニ用、長茶杓ハ臺天目ノ時用也、

〔茶道要録^上〕茶杓之事

鄭烟ガ茶譜ヲ按ズルニ、撩雲ハ茶具十六箇ノ内、竹ノ茶匙也ト云リ、撩ハ取物ヲ攪ルト注ス、竹ノ
茶杓唐朝ニ初ル、倭朝ニハ往昔象牙ヲ以テ作ル、其比象牙希有ナリ、故ニ侘人ハ水牛角ニテ作、
汚穢ヲ厭テ漆ニテ塗テ用ユ、然ヲ祖師珠光輕ク侘テ、竹ノ目ノ添樋有テ節ナキヲ以テ作ル、紹鷗
モ亦從之、其後利休ニ至テ、竹ニテ作ランニハ節アラデハトテ、添樋ナキ節竹ヲ以テ造ル、自此已
往皆從之、樋ハ茶ヲ匙フニ便リス、故ニ能茶ヲ杓者ヲシテ、樋無ノ竹ニテ削リ與ヘタリト也、象牙
ニ丸柄ト角柄ト二ツノ形アリ、竹ニハ形ナシ、茶盛ノ大小ニ因テ削ル、勿論大格ノ制アリ、匕形ニ